

---

# **聖夜に愛を！**

河 美子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖夜に愛を！

### 【Zマーク】

Z0802

### 【作者名】

河 美子

### 【あらすじ】

私、井出美里は京都から彼のいる東京へ来ました。明日はイブだし、クリスマスは彼と一緒に…。いそいそと部屋に入つたら…

## プロローグ

### プロローグ

私は井出美里。大学2年生。高校から付き合っている沢渡涼のもとへ来たの。秘密で、この1~2月の押し迫った23日。試験も済んだし、いいんじゃないの。ルンルン気分で新幹線に飛び乗つて来たのよ。先月の彼の誕生日には革のキーケースを送つて喜んでくれたし、バイトして買ったの。貧しい私には5千円は痛かつたわ。でも、彼が喜んでくれるならと、メールで喜んでいるつて來たけど前よりテンション下がつてゐるかなと、ちょっと氣になつて。夏には彼と一緒に初めて朝までいることもできて、チョーラブラブの私たち。

遠距離恋愛がうまくいかないなんてことないわ。この2年、離れてるけどどうにかこうにかうまくいつて。今日は鍋でも作るうと思つて、こうやって材料まで持つてきたの。ちゃんとこじりみどり思つて、つみれも作るつもり。ふふふ、楽しみだわ。

この階段を上がつて3つ目の部屋。合意鍵も貰つちやつたし、そうつと。

「うん？」

この靴女物、えつ、どうこうこと？

ふすまを開けると、彼の横に女の子が寝てる。とこつより、裸の胸に顔をうずめて。

「えーっ！」

「えーっ！」

「えーっ！」

と、3人の驚きのバカみたいな言葉。鍋の材料を振りまいて、あわてて出てきた。心臓が止まりそう。もつどうすればいいの。訳が分からない。歯の根も合わないほどガチガチ震えて、何がどうなつてるかもわからない。

涼とは5年目よ。付き合って深くなつたのはまだこの夏から。つまり、その3日だけ。オクテの私はずっと清純にと思っていたけど、20歳になつたからと決心したのは私の誕生日。彼がステディリングを買ってくくれて。それが婚約指輪のような気がして…。でも、違つたの？

涙も止まらない。往復の切符を買つたのは不正解。鍋料理の材料も奮発したから、財布はホテル代はない。でも、このまま帰るとお父さんが心配するわ。サチと行つてくるつて出てきたのに。サチは友達のところへ行つちゃつたし、サチの友達の場所なんて私は知らないし。

涼からは何も来ない。あの状況じゃ弁解しようもないしつてこと？ひどいひどい。私つて何だつたの。こちから掛けてもあの恥まわしい姿が浮かんてきて、混乱して何を言つつかわからない。あの子は誰？いつからなの？先月よ涼の誕生日は。先月は忙しくてお互い逢えなくとも今まで平氣だつたのに、何が起きたの？

そうだ、東京には沙織がいた。橋本沙織。私と中学、高校と同じ学校へ行き、大学は東京に来たんだ。離れてからは連絡とつてなかつたけど、夏に偶然会つてケータイの番号聞いてた。

「もしもし、私美里」

「どうしたの、久しぶりだねえ。どうしたの？」

「ふえーん、わ、私、ふ、ふえーん」

「な、何よ。どうしたの？」

沙織はすぐに来てくれた。私は今日の出来事を話しているうちに、惨めな状況を話せば話すほど辛くて泣きじやぐるしかなかつた。取りあえず、彼女は下宿に連れて行つてくれるつて。今日は泊めてもらえることもありがたい。鍋の材料、置いてきちゃつたし、どこまでお人好しなのと余計に情けなくなつてきた。ああ、アジでつみれを作るはずが…。

## 第1章

### 第1章

沙織の部屋は、「ここはどうという感じの築50年。共同トイレと台所、風呂なし、部屋は4畳半と押入れのみ。なんとなくトイレの臭いがしてくる。炬燵と小型冷蔵庫とテレビで満杯。どこに泊めてくれるの？　はい炬燵ね。わかりました。文句はいいません。

「泣いたらお腹が空いたわ。今晚は私が作るね。何か食材ある？」  
「食材？　米は3合、干し椎茸、ソーメン、ジャガイモ、とうろく昆布、シーチキン」

「わかつた。何か作る」

「でも、油ないよ。ポテトフライは無理」

「煮るの、シーチキンと」

「夏の名残りの冷たいソーメン？」

「ううん、温麺にする」

「家から送つて来た椎茸は？」

「戻して味付けしたら温麺にのせる」

「なんか、シェフに見えてきたよ。美里」

「任せといて、こう見えても5年生からの主婦歴があるから」

私の母は5年生で病氣で亡くなつた。それ以来父と一人で暮らしてきました。私が料理を作つて父は洗濯、掃除をすることに。でも、最近はほとんど私がしてきた。父は小さな会社でリストラされそうになりながらも残業を黙々とこなしていた。そんな父を尊敬している。今回も家庭教師のバイトをして貯めたお金でここへ来たのに。こんな目に会うために来たかと思うと、泣けてくる。

「大丈夫？　私が御飯炊くね」

「うん、お願ひ。私はジャガイモでいるね」

共同台所で作っていると、一人の男性がやつてきた。

「うーん、いいにおい。沙織ちゃん、お願ひだから、『いかがうしほ』

「あー、堺先輩。どうしようかなあ。デザートにリンクゴをくれるな

ら

「わかった。持つてくれる」

堺重人は青森出身の4回生。就職がまだ決まらず、今年の冬は田舎にも帰らないといふか、帰れないそつだ。リンク農家の彼のところへ、毎年訳ありリンクゴが送られてくるのでそれをくれるといふ。手に6個のリンクゴを持って走つて来た。

「足りなかつたら、もっと持つてくれるよ。これでいい?」

「オーケー。こちらは親友の井出美里さん」

「ほうほひ、20歳のお嬢さん。よろしくお願ひします」

私は挨拶しながら、椎茸をもどしたり、手を休まず動かしていると、

「何だかお母さんみたいだね。手つきがすげい」

「やうなの、主婦歴が長いの、美里は」

ゆであがるちよつと前にシーチキンも入れて砂糖と醤油で味付け。さらにソーメンもゆでてあげておく。残つてた賞味期限の切れた麵つゆも使って、温麺を作る。

「美味しそう。もうたまらないねえ」

沙織も堺先輩も匂いを嗅いでやめない。笑いながら御飯を塩むすびにして、とろろ昆布を巻く。3合だとそんなに沢山はできないけど、温麺とジャガイモでお腹は張るだろひ。

「さあ、部屋に運ぼひ」

炬燵の上にたくさんの食器がないので、自分の部屋から堺先輩は皿や器をもつてきた。

「堺先輩、お酒はありますか?」

「うん、あるよ、この間の残り」

堺先輩は子供のように食べたくてたまらないから、走つて行つて走つて帰つてくる。手には焼酎と氷。助かる氷、小型の冷蔵庫は製

氷皿も小型だから。

「さあ、いよいよ。堺先輩、よだれよだれ」

「ああ、すまん。ついつい」

「汚いなあ。じゃあかんぱーい」

美味しいと、喜んで食べてくれる二人に満足しながら、私は焼酎のロックを飲む。こんなお酒そのものを飲むのは初めて。父は飲むけど、私は缶ビールを分けてもらう程度だったし。すごい気分がハイになつて来た。

## 第2章

### 第2章

「酒持つてこーー」

「おい、沙織ちゃん、君がやけ酒飲んでびうするの」

「今日は美里の慰め会よ。飲んで悪いかーー」

「いや、悪くないけど、美里ちゃんは笑ってるよ」

「ふあっはっは。もあり、もつろのんれー」

もうほとんど崩壊状態の一人に、堺先輩は苦笑いしながらもパックのご飯を持ってきて、温麺の残った汁にレトルト御飯を入れて、ひと煮立ちして卵を入れて雑炊にしてくれた。

「なあんら、りょうりできるんじやーーん」

「はいはい、これは料理とは言いません。入れて煮るだけですから。酔っ払いの20歳の乙女に呪ぐす男。」これぞ、男の中の男でしょう

「そうらー

「いいぞー」

もう手に負えない私たちに雑炊をたべさせると、そのまま3人ともダウン。炬燵でごろ寝となつた。

翌朝、私たち2人は起きることができずに、昼を迎えると、夜を迎えた。

「うーん、流石に冷えるよ。吐いてばかりだと」

沙織がそう言いながら、眉間にしわを寄せている。私はもう起きる気力もなく、寝転んだまま聞うなずく。すると、堺先輩がやって來た。

「おーい、起きたか。戦利品を持って來たぞ」

「頭に響く、お静かにお願いします」

「何言つてんだ。今日はクリスマスイブだぞ。ほらみる、一人にプ

「レゼントだ」

その言葉に卑しい一人が飛び起きた。

「わーっ、赤いリボンだ」

「どっちがどっち?」「

「好きな方を選べよ」

「じゃんけんで決める。私が買った。でかい方にする。ちっちゃい方がいいかな。一つとも手から離れない。

「早く、何時までも悩むんじゃないの」

「じゃ、こひね」

結局、小さい方になった。開けると、可愛じ雪の結晶のブローチ。でかい方はマフラーだった。

「すうい、どうもありがと」

「どういたしまして。戦利品だから気にしないで」

それにして、こんなプレゼントをパチンコで取つてくるなんて、いい人だなあと感激する。よしあや、私も何か作ることに決めた。

「堺先輩、そちらの袋には何が入つてますか?」

「おひ、こひちは、昨日のうちにそいつになつたから、鍋の材料と思つて白菜、白ネギ、油あげ、豆腐と肉で豆乳鍋のスープ」

「やつたー」

「じゃ、今日の鍋は沙織と堺先輩に任せて、私はリンクジャムを作ります。これがあると、風邪ひいたときも入れて飲むといいし、パンにのせれば美味しいし」

なんか、うきうきする。すると、ケータイが鳴った。涼だ。一人もじつと見てる。

「もしもし」

涼の声が懐かしい。でも、昨日のことは忘れない。涼は会いたいって。

「無理。私会いたくないし、会えない」

沙織がケータイを奪い取つて、

「涼、沙織だけどどんなにひどい」としたかわかつてゐるの? 今日

は無理よ。もうたつぱり傷ついたもの」

私は倒れそうだけど、涼の声が聞きたいたのも事実。ケータイに向かって

「あの人はどうするの?」

返事はもつとひどかつた。

「ごめん、あいつとはもう一緒に住んでるんだ」

沙織は

「涼、ひどいよ。馬鹿野郎!」

私は体が震えるほど寒くなつた。心が凍えると体の熱も奪われるんだ。すると、堺先輩はケータイを取り上げてこうこつた。

「君ねえ、そんな嫌なことを伝えるために電話してきたの? 十分彼女は傷ついて、やつとやつとの状態なのに。もう話すことないなら切るよ」

涼は黙つて切つたようだ。

「私リンゴジャムを作るから。ありつたけの砂糖頂戴」

共同台所にいき、リンゴを洗つてると涙がぽろぽろこぼれてきた。やがて、泣き声まで出ちゃつて。でも、二人は台所に来なかつた。一人で泣かせてくれた。

しばらくすると、包丁の音が響くと、二人が鍋の材料を洗いに来た。

「今日も飲む?」

「うん、もうイブだし」

「ケーキを明日は買つてくるね。安くなるし」

よかつた。今日もこんなに心が休まる友達がいて。堺先輩はコンビニに酒を買いに行つた。リンゴはイチヨウ型に切り、「どじ」と煮て砂糖をたっぷり。

今日はクリスマスイブだつた。そうだ、食パンのケーキにしよう。フレンチトースト3枚の上にこのリンゴジャムと粉砂糖をかけて、ケーキに見えないことはない。ケーキと言つたらケーキなんだ。沙織は下に彼が来たつて、みんなが紹介してよつて言うと連れてきた。

「こんばんわ」

感じのいい人。佐野純という同級生だつて。ふうん、こういう人が好きなのかつてまじまじ見てしまつた。沙織はつきり堺先輩が好きと思っていたのに。そう言つと、

「堺先輩は隣の住人で、お友達。彼ではないよ。恋愛関係なんて無理。兄貴みたいだもん」

「いい人なのに」

「あれあれ、美里ちゃん。いいんじゃないの」

「無理。今はそこまで考えられない。振られてしばらくは恋はいいわ」

堺先輩は焼酎とシャンパンメリーとを買つてきた。

「おう4人でクリスマスか。いいなあにぎやかで。俺も一人じゃないやだもんな」

私も同感だつた。こんなイブになるとは思つてもいなかつた。沙織には恋人と二人でなくて悪いけど私はほつとしてる。一人だつたら寂しくて辛くて何をしていたか自信ない。こいつやって、ここで過ごせて本当によかった。

## 第3章

「はい、今日はクリスマス。

一日酔いの若者4人で、ちょっとお散歩に出かけようと「う」とになつた。沙織は彼と、すると、必然的に私と堺先輩。

「先輩はもう4月から社会人でしょう？」

「それを言われるとつらいね。だつて、まだ決まってないんだよ。勤め先が。だから、家に帰つて来いつて言われても、どの面下げて帰れると思う？」

「そうなんですか。でも、こちらにいても会社も休みでしょ？」

「うん、でも、少しでも探している恰好だけでもしないと、まずいだろう。普通に冬休みってわけにはいかないよ」

「なるほどね。青森はないんですね」

「うん、探すなら東京だね。今内定されてるものがないのは辛いよ」「私も今から考えないと大変だなあ」

今日はいいよ帰る日だ。私はいつまでも一緒に沙織のクリスマスティーに悪いし、昼には帰るつもり。ここでの過ごした3日はいいことばかりだった。もちろん、最初からここへ来る気はなかつたのに。でも、涼のことはもういいんだ。不思議なくらいに平気なのは今まで逢わないことが当たり前だつたし、ここでみんなと過ごして、大切なのはクリスマスに恋人と過ごすイベントが大事なのではなくて、心がなごむ人たちがいればそれだけで十分楽しいってこと。堺先輩は恋人ではないけど、今こうして話していると落ち着くし楽しい。堺先輩だつて一人では就職が決まってなくてブルーだつたつて言つしあ互いに沙織に助けられたねつて話した。

下宿に帰ると、荷物をして着ていたコートにブローチを付けた。よく似合つ。沙織は送つて行くつて言ってくれたけどそんなには甘

えられない。

「いいの、一人で楽しんで。私も帰つて父とクリスマスするわ」

「そうか、また懲りずに来てね」

「もちろん。沙織、本当にありがとう」

駅には一人で電車を乗り継いで行つた。新幹線は結構恋人が多い。別れがたくて手をつなぎ合つてる一人、さめざめと泣いてる子、私も暗い気持ちが蘇つてくる。寒いベンチに座つていると、涼がやって来た。

「どうしても謝りたくて來た。本当にごめんよ。俺、寂しがり屋で、甘えん坊で、駄目男だ。何と言つても弁解の言葉はないよ、傷つけらつもりはなかつたけど」

「もういい。辛いのは事実だけど、離れてもつまむいくつて勝手に思い込んでたし。もう事実を見ちゃつたし」

「悪いとしかいいようがないんだけど」

「ここは沙織に聞いたの？」

「うん、いっぱい叱られた。泣いて怒つてたよ」

その言葉を聞くと、鼻の奥がつんとした。沙織、本当にありがとう。

「涼、もういいよ。寒いから帰つて」

「ごめんな」

「ひとつ教えて。彼女とはいつから？」

「俺の誕生日に手作りのケーキを届けてくれて」

私のプレゼントは嬉しくなかつたのつて聞きたかったけど、もうどうでもよかつた。やつぱり近い恋人なのね。遠くでは無理なのね。新幹線が出るまで涼は送つてくれた。人は恋人同士つて思うんでしううね。違うのに。涼は謝つてくれたけど、人肌恋しい時に遠くにいたつて仕方ないね。でも、それは踏ん張つてほしかつた。私だけ寂しいんだもん。

ベルが鳴つて彼は手を振つて泣いていた。その涙は後悔？ 未練

？ ううん、涼の気持ちは戻らない。それは分かつた。

「元気でな。さよなら」

「涼も元気でね。さよなら」

車内でも私の涙は止まらない。みんなの視線も感じるけど、今は泣かせて。

3時間後に京都駅。寒いしもう暗くなっている。東京に負けないほどの人が歩いてる。市バスに乗って御池まで。この路地の角を曲がつたら家が見える。

「あれ、お父さんどうしたの、そのツリー」

「お帰り。貰ったんだ。もうクリスマスは終わりなんだから処分するつて、そこの店のオーナーがいうから」

「へえ、大きいね。家に飾るなんてお母さんが亡くなつて初めてだね」

「ああ、そうだな。いつもこの季節は大忙しだから」

「嬉しいわ。私今から残ってる飾りをさがすわ」

父と物置から古い箱を開けると、懐かしいサンタの顔やローソクの形のフェルト、可愛いプレゼントの包みや靴下。お母さんの臭いがするみたいっていうと、一人の目が真っ赤になっちゃつた。一つ一つをツリーにつけていく。懐かしいライトをつけると、クリスマスツリーらしくなった。

## 最終章

### 最終章

「美里、このツリーの横にこれをお置いておくよ」

「なあに」

「お母さんの着物さ。もうお前が着たらいじよ。袖を通してないよ  
えつ、そうなの？」

「ああ、お前の成人式はこれにするか？」

「忘れてた。そうだね」

その着物は淡いピンクの花柄で、紋も付いていて付け下げという  
らしい。帯も金糸の亀甲柄。なかなか素敵。来月は成人式だ。

「この着物はどうしたの？」

「お母さんが病気が進んだ時に作ってほしいって。美里の成人式に  
着せたいって」

話を聞いて泣けてきた。母さん、どんな気持ちでこの着物を作っ  
たのかしら。たまらなかつただろうなあ。そのつらい気持ちが伝わ  
つてくる。

「ちょっと袖を通して見るかい」

「うん」

肩にかけて袖を通してと、とても似合ひ。お母さんには私がこれが  
似合つて分かっていたのかしら。

鏡に映る自分は若い母の気持ちが込められたからなのか、いつも  
より白い顔に変身させてるようだ。

「お父さん、お母さんは幸せだったね」

「そりがなあ。最後にはそりがなしてくれたけど、あの若さで死ぬな  
んで幸せとは思えないけど」

「つりん、お父さんに愛されて幸せよ」

「ははは、娘にそう言わると照れるな

「だつて、このシリーの飾りだつてちゃんと残しておるし、着物もこんなにきれいなままで9年間も保存して」

「お母さんはまだ35歳だったからな。残ってる着物はまだあるよ。

和ダンスを見てご覧」

「うれしいわ。私、今度から着付け教室に通うわ」

「おばあちゃんがお母さんの嫁入りに作ってくれたものだよ。どれも新品同様だ。お母さんは着る暇なかつたから。お前が着てくれたお母さんも喜ぶよ。おばあちゃんもね」

「私、浴衣は着れるからちょっと、こつちの絹に挑戦してみる」

「そうか、それは着やすいだらう」

悪戦苦闘して1時間、できた。帯は普段だから半幅にしたからできたんだけど。

「ジャーん。お父さん見て」

「ほひ、よく似合つよ。写真撮つてやう。シリーのところで」

「うん、お願い」

パチパチと何枚も撮影する父さん。私もモデルになつきつて撮るけど、本当に似合つてるかなあ。

ピンポン

「電報です。井出美里さん」

「私ですか？」

「フラン電報です」

届いたのは可愛い花束。堺先輩だ。今日別れたばかりなのに。

『今日、内定通知が来ました。小さな会社ですが、頑張つて働きます。もしよかつたら、今度は先輩でなくて友達として付き合つて下さい。26日に京都へ行きます。堺重人』

「どうしたんだい？」

「あつ、お父さん。プレゼントが届いたの。お花をくれたの」

声が震えているのは泣いてるんじゃない。遠距離恋愛なんてこりごりつて思つてたのに、今また始めるなんて私にはできるのかしら。ううん、恋愛じゃないつて書いてる。友達からなんだ。

「美里、あわてなくともこいつて言つてくれてるんだから、ゆっくり積み上げてみるよ。できないときもあるわ」

「うん」

お父さんは何かあつたつて分かつてゐるね。

「お父さん、何食べる? 今日は鶏の照り焼きある? クリスマスだし」

「そうだな、美里が作るものは何でもつまいかり迷つな

「あら、そんなこと言つて」

「今日は酒も飲むや。熱燗にしてくれ」

「私も」

「おう、もう二十歳だからな」

ピンポン

今度は誰?

「ケーキのお届けです」

「はいはい、僕です」

お父さんたらまだ私が子供のつもりでいるのね。いいわ、今日で3連ちゃんな飲み会だけど、私がどれほど飲めるか教えてあげましょう。

「メリークリスマス」

「そうだな、今日はメリークリスマスだ」

「今年はたくさんの方の愛を貰つた気がする。無くしたものもあつたけど、お父さんとお母さんから。やっぱり、サンタさんはいるのね」

「かもな。お前のサンタは遅れて明日も来るんだどう」

「うん。まあね。お友達です」

「聖夜に花を贈るお友達か。愛だけは当日に届いたようだな」

「ふふふ、聖夜に愛を! かんぱーい!」

「かんぱーい!」

冬の京都の夜はしんしんと冷え込みます。井出家は別のようですが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0802j/>

---

聖夜に愛を！

2010年10月8日15時43分発行